
大きな、温かい手

オムラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな、温かい手

【Nコード】

N4184T

【作者名】

オムラ

【あらすじ】

ごくごく普通の社会人だったが、いきなり異世界の森の中にそこで出会ったのは、熊さんみたいに大きな男の人だった。

熊さんに保護されながら、勉強して、帰る方法を探そうとするが……

本編完結しました。

走る、ひたすら走る。

全速力で走ったのは何時振りだろう。数年ぶりであることは間違いない。

しかしここまで必死になって走ったのなんて初めてだと思う。

死に物狂いで走るなんて、平和ボケした日本では中々有り得ない状況だろう。

何故私が走っているのか。それは、此処が日本ではないどころか、全く別の次元である、かもしれないからだ。

ものすごく曖昧なのはご了承ください。何分私自身が把握しきれていないのです。

ざっくりと説明すると、まずおよそ2時間前に遡る。

約2時間前、仕事を終えた私は会社から帰宅した。鍵を開け、扉を開けるとそこは闇であつた。わけがわからない。

疲れていた私は何に気がつくこともなくそのまま闇に足を踏み入れ、落下した。

落下して着いたのがここだつた。

ここは森であつた。木々に囲まれ、マイナスイオンがぶんぶんしそうな森である。異世界の。

何故異世界だと判断したのか、それは私が死に物狂いで全力疾走している原因でもある奴の存在だ。

奴と出会ったのはここに落下してから1時間と30分ほど経ってからだ。

どうにかして森から出る、若しくは誰か人と出会つたためにも私は森を徘徊していた。1時間も過ぎて気に凭れて休んでいた時だつた。

奴が目の前に現れたのだ。

奴、その正体は見たことのない獣であった。

日本は勿論、世界中探しても存在しないような獣。それこそファンタジーの世界にしか出ないような獣なのだ。

基本的なフォルムは犬、だ。

ただしそれにいくつかの付属物がある。

一つは角。額から一本によきつと生えている。

二つめは色。ベースは灰色なのだが、手足や耳など所々が金色だったりシヨッキングピンクだったりする。

そして極めつけの三つ目は羽だ。

奴は犬のくせに羽をつけていたのだ。

その時私はここが日本ではない、それどころが私の知っている世界ではないと考えた。

しかしじっくり考える間もなく、犬もどきは私めがけて突進してきた。

sonでもって冒頭に至るわけだ。

犬もどきは四足を使って駆けてきている。羽を使って飛んできたらどうしようと思ったが、あれはもしかしたらただの飾りなのかもしれない。というかそうであって欲しいな。

だが、そろそろ限界が来ている。元々体力に自信があるわけでもないのに、その上しばらく運動をしていない。

今までもつていたこと自体に驚くぐらいだ。

「つく！」

とうとう限界がきた。何も無いところでこけてしまい、倒れてしまった。

やばい、早く立ち上がらないと。奴が、

「グルルルルッ」

「！」

遅かった。

後ろを見ると、すぐそこには犬もどきが。しかも羽をバサバサさせて浮いている。宙に浮くことで、何だか威圧感が増しているように見えた。

やばい、死ぬ。

身体が震える。

夢だと思いたいのに、さっきこけたせいで生まれた痛覚がそれを否定する。

なんで、だれか、たすけて。

犬もどきの距離がゼロになりそうになり、現実から逃げるように目を瞑った。

「グアアアアアアアッ、アアッ」

酷い呻き声が聞こえて、そして途絶えた。

私は、死んでいない。

安堵からか疲労からか、一気に体の力が抜ける。…あれ？助かったのは良かったけれど、一体何が起こったのだ？

恐る恐る目を開けると、そこにはさきほどの犬もどきを優に超すほどの大きさの熊のシルエットがあった。

今度こそ、終わった。
私はそこで意識を手放した。

*

目を開けたら熊がいた。

「ひっ！」

と、思ったら熊みたいに大きな人だった。

私はふかふかのベッドの中にいて、熊さんは枕元で私の顔を覗き込んでいた。

意識を失う直前に見た熊さんはこの人だったのだろうか。

熊さんの容姿は欧米人のような容姿だった。髪の毛は金色の無造作ヘア（適当ともとれる）。彫りは深く、目の色は綺麗なスカイブルー。身体つきは熊かと思うほどのだから、相当がっちりしている。鍛えているのがよくわかる身体である。

ぼーっと熊さんを観察していたら、熊さんは眉間に皺を寄せて喋った。

「

」

ん？

「

」

どうしよう、何を言っているのかさっぱりわからない。すっかり失念していたが、ここは異世界なのかもしれないと予想していたのだ。熊さんが話しているのはきっとこの世界の言葉なのだろう。決して日本語ではなく、英語でもない。フランス語でもないし……つまり全く耳にしたことのない言葉なのだ。

語尾が上がっているから、何か問いかけをしているのかもしれないが…。名前を聞いているのか？

「…優里」

熊さんは首を傾げた。

私は人差し指で自分を指さし、

「優里」

と言った。

熊さんはじつと私を見つめた。

「

」

さっきよりも長い言葉。何か違うことを問いかけているらしい。でも、わからない。とゆうか、さっきのも本当に名前を聞いていたのかもわかっていないのだ。先ほどの熊さんの反応を見る限り間違っていたような気がするのだが。

私は首を左右に振った。わからない。何もかもが、わからない。

熊さんは再び私のことをじつと見つめた。

すると、熊さんの大きい手を自身の胸元に当てて

「ベルク」

と言った。

ベルク。この人の名前なのだろうか。

「…ベルク」

私がそう言ったら、熊さんは目を細めて頷いてくれた。
そして、その大きな手を私の頭にのせ、撫でながら

「ユリ」

と、言った。

その手が暖かくて、安心して、泣けてきて。

私は子供のころ以来初めて、他人の前で声を出して大泣きした。

01（後書き）

息抜き小説です。
初めてのトリップものでした。

ご都合主義で申し訳ないが、私がここに来てから数か月が経った。その間ありがたいことに熊さんことベルクの元に置かせてもらっている。

私が倒れて連れてこられた場所は森の中にあつたベルクの家だった。家といっても極一般的な一軒家とかではなく、ヨーロッパ的なお屋敷といったほうが良い。部屋は十数個ほどあり、とても広い。

そこに住んでいるのはベルクともう一人だけで、その一人と言うのがお婆だ。

外見はとてつもなく魔女っぽい。鼻は鍵鼻で、いつも黒いマントを身につけている。けれど中身はとももおらかなおばあちゃんである。お婆はベルクのお世話係として、そしてこのお屋敷の管理も任されているらしい。私はこのお屋敷でお婆のお手伝いをさせてもらいながら、勉強をさせてもらっている。

今すぐにでも元の世界に変える方法を見つけたいのだが、この国、この世界に対する知識も何もない状態では全く身動きが取れない。と、いうわけでベルクとお婆の二人から教わって、日々勉強に励んでいる。

「おはやー、ベルク」

「おはよう、ユリ」

……やはり発音が難しい。まだまだ努力が必要だ。そんなことを考

えながらしかめ面をしていたら、ベルクが私の頭を撫でてくれた。ベルクの手は大きい。（というか、手に限らず全部大きい。身長は2メートルぐらいある。お婆も170弱ぐらいある。もしかしたらこの世界の平均身長はあっちと比べて大きいのかもしれない）大きな手で撫でてくれるのは、何だか子どもになったようで少し気恥ずかしい気もするが、ちよつと嬉しかったりする。

私はどちらかというと身長も大きく、加えて普段から落ち着いていて、実年齢よりも上に見られがちだった。

いつも周りからそう見られていて、そうあるべきだと考えるようになっていた。

けれどこの世界に何も知らないまま来て、頼ることしか出来なくて甘えてばかりでいる。

ベルクは頭を撫でるのは毎日のようにしてくるし、ときどき子どもを抱っこするように片手で私を抱えたりすることもある。

決して軽くはない私を軽々と持ち上げるベルクは、所謂騎士というものらしい。

週5くらいで、イギリスの衛兵を思い起こさせるような制服を着て出かけて行く。その凛々しい姿はとてまかつこいい。とてつもなくかつこいい。

顔立ちも中々整っていて、すごくモテそうな気がする。気がするとうるか絶対モテるだろうね。

がつちり体系で、寡黙で。正直私の好みドストライクな人から優しくされたら、ときめかないわけがない。

今、こうやって精神的に狂うことなく前向きに頑張っていけるのも、素敵なベルクと優しいお婆のおかげである。

今日もかつこいい制服を着て出かけるベルクをお見送りしてから、お婆のお手伝いをして、勉強に励もう！

＊

夜になり、私はベルクの帰りを今か今かと待っている。

今日の語学の勉強（完全に幼児向けのイラスト付きの本を教科書としている）で、とても良い言葉を教わったのだ！

お婆に言ったらとても喜んでくれた。きっとベルクも喜んでくれる、と思う。わくわくしながら私は待っていた。

「ただい」

「おきやえり、ベルクっ！」

若干被ってしまったけれど、ベルクは嫌な顔を見せず、駆け寄る私を見て微笑むように目を細めてくれる。そしてすぐ傍まで来た私を片手で抱き上げた。

「ただいま、ユリ」

そう改めて言っ、またその大きな手で撫でてくれる。その居心地の良さに一瞬眠気に襲われたが、それを振り払い、ベルクに言った。

「きよう、言葉、習う、した。私、ベルクに、言う。聞いて、おねあい」

「うん、勿論」

今日習ったことを頭の中で復習する。よし、大丈夫だ。ちゃんと覚えてる。

「ベルク、いつも、ありがとう」

ありがとう、は前に習った言葉。比較的最初に教科書に載っていた。これからが本番だ。

「私、ベルク、好き」

「！」

「好き、いっぱい。私、ベルク、好き、いっぱい。ありがとう、ベルク。好き、いっぱい！」

よし、言えた。自分では見えないけれど、おそらく今自分は所謂ドヤ顔をしているだろう。
ドヤ顔でベルクを見る。しかし、そこには私が期待した反応はなかった。

ベルクは私がここにきてから初めて見せるような、目を見開いて呆けるような顔をしている。

「…ベルク？」

「……」

もしかして、何か変なことを言ってしまったのだろうか。おかしいな、ちゃんと覚えたはずなのに。

お婆に助けを求めようと、振り返ろうとしたときだった。微動だにしていなかったベルクが急に動いた。

「!？」

ベルクはゆっくりと顔を私の顔に寄せたかと思うと、そのままくっつけてきた。ただくっつけたと言っても、ベルクの唇が私の唇のすぐ横にくっついたのである。……ほぼキスじゃん！

あまりにも予想外の出来事に、今度は私が固まった。どれほどその状態だったのなんてわからない。10秒だったかもしれない、もっと短かったかもしれないし、長かったかもしれない。時間の感覚も麻痺するくらい驚いた。

「

」!

さっきとは逆に、勢いよく離れたかと思うと、ベルクは私を地に降ろした。そして早口に何か言った後、足早に去って行った。一連の流れについて行けなかった私は、ベルクの後ろ姿が見えなくなった後も暫く呆然としていた。

私たちのこのやりとりを見ていたお婆が、ニヤニヤしていたなんて全く知る由もなかった。

02（後書き）

追記：脱字どころか脱文していましたごめんなさい。数か所直しましたが、話自体には何の影響もありませんですごめんなさい。

01 (台詞有) (前書き)

ベルクの台詞があるだけのものです。

01（台詞有）

走る、ひたすら走る。

全速力で走ったのは何時振りだろう。数年ぶりであることは間違いない。

しかしここまで必死になって走ったのなんて初めてだと思う。

死に物狂いで走るなんて、平和ボケした日本では中々有り得ない状況だろう。

何故私が走っているのか。それは、此処が日本ではないどころか、全く別の次元である、かもしれないからだ。

ものすごく曖昧なのはご了承ください。何分私自身が把握しきれていないのです。

ざっくりと説明すると、まずおよそ2時間前に遡る。

約2時間前、仕事を終えた私は会社から帰宅した。鍵を開け、扉を開けるとそこは闇であつた。わけがわからない。

疲れていた私は何に気がつくこともなくそのまま闇に足を踏み入れ、落下した。

落下して着いたのがここだった。

ここは森であつた。木々に囲まれ、マイナスイオンがぶんぶんしそうな森である。異世界の。

何故異世界だと判断したのか、それは私が死に物狂いで全力疾走している原因でもある奴の存在だ。

奴と出会ったのはここに落下してから1時間と30分ほど経ってからだ。

どうにかして森から出る、若しくは誰か人と出会ったためにも私は森を徘徊していた。1時間も過ぎて気に凭れて休んでいた時だった。

奴が目の前に現れたのだ。

奴、その正体は見たことのない獣であった。

日本は勿論、世界中探しても存在しないような獣。それこそファンタジーの世界にしか出ないような獣なのだ。

基本的なフォルムは犬、だ。

ただしそれにいくつかの付属物がある。

一つは角。額から一本によきつと生えている。

二つめは色。ベースは灰色なのだが、手足や耳など所々が金色だったりシヨッキングピンクだったりする。

そして極めつけの三つ目は羽だ。

奴は犬のくせに羽をつけていたのだ。

その時私はここが日本ではない、それどころが私の知っている世界ではないと考えた。

しかしじっくり考える間もなく、犬もどきは私めがけて突進してきた。

そんでもって冒頭に至るわけだ。

犬もどきは四足を使って駆けてきている。羽を使って飛んできたらどうしようと思ったが、あれはもしかしたらただの飾りなのかもしれない。というかそうであって欲しいな。

だが、そろそろ限界が来ている。元々体力に自信があるわけでもないのに、その上しばらく運動をしていない。

今までもつていたこと自体に驚くぐらいだ。

「つく！」

とうとう限界がきた。何も無いところでこけてしまい、倒れてしまった。

やばい、早く立ち上がらないと。奴が、

「グルルルルッ」

「！」

遅かった。

後ろを見ると、すぐそこには犬もどきが。しかも羽をバサバサさせて浮いている。宙に浮くことで、何だか威圧感が増しているように見えた。

やばい、死ぬ。

身体が震える。

夢だと思いたいのに、さっきこけたせいで生まれた痛覚がそれを否定する。

なんで、だれか、たすけて。

犬もどきとの距離がゼロになりそうになり、現実から逃げるように

目を瞑った。

「グアアアアアアアッ、アアッ」

酷い呻き声が聞こえて、そして途絶えた。

私は、死んでいない。

安堵からか疲労からか、一気に体の力が抜ける。…あれ？助かったのは良かったけれど、一体何が起こったのだ？

恐る恐る目を開けると、そこにはさきほどの犬もどきを優に超すほどの大きさの熊のシルエットがあった。

今度こそ、終わった。

私はそこで意識を手放した。

＊

目を開けたら熊がいた。

「ひっ！」

と、思ったら熊みたいに大きな人だった。

私はふかふかのベッドの中にいて、熊さんは枕元で私の顔を覗き込んでいた。

意識を失う直前に見た熊さんはこの人だったのだろうか。

熊さんの容姿は欧米人のような容姿だった。髪の毛は金色の無造作ヘア（適当ともとれる）。彫りは深く、目の色は綺麗なスカイブルー。身体つきは熊かと思うほどのだから、相当がっちりしている。鍛えているのがよくわかる身体である。

ぼーっと熊さんを観察していたら、熊さんは眉間に皺を寄せて喋った。

『大丈夫か？』

ん？

『…大丈夫か？』

どうしよう、何を言っているのかさっぱりわからない。すっかり失念していたが、ここは異世界なのかもしれないと予想していたのだ。熊さんが話しているのはきつとこの世界の言葉なのだろう。決して日本語ではなく、英語でもない。フランス語でもないし…つまり全く耳にしたことのない言葉なのだ。語尾が上がっているから、何か問いかけをしているのかもしれないが…。名前を聞いているのか？

「…優里」

熊さんは首を傾げた。

私は人差し指で自分を指さし、

「優里」

と言った。

熊さんはじっと私を見つめた。

『もしかして、言葉がわからないのか？』

さつきよりも長い言葉。何か違うことを問いかけているらしい。でも、わからない。とゆうか、さつきのも本当に名前を聞いていたのかもわかっていないのだ。先ほどの熊さんの反応を見る限り間違っていたような気がするのだが。

私は首を左右に振った。わからない。何もかもが、わからない。

熊さんは再び私のことをじっと見つめた。

すると、熊さんの大きい手を自身の胸元に当てて

「ベルク」

と言った。

ベルク。この人の名前なのだろうか。

「ベルク」

私がそう言ったら、熊さんは目を細めて頷いてくれた。そして、その大きな手を私の頭にのせ、撫でながら

「ユリ」

と、言った。

その手が暖かくて、安心して、泣けてきて。

私は子供のころ以来初めて、他人の前で声を出して大泣きした。

01 (台詞有) (後書き)

優「大丈夫だ、問題ない」
べ「え？」

02 (台詞有) (前書き)

一文だけです。どう載せたら良いのかわからず、大胆にいました

02（台詞有）

ご都合主義で申し訳ないが、私がここに来てから数か月が経った。その間ありがたいことに熊さんことベルクの元に置かせてもらっている。

私が倒れて連れてこられた場所は森の中にあつたベルクの家だった。家といつても極一般的な一軒家とかではなく、ヨーロッパ的なお屋敷といったほうが良い。部屋は十数個ほどあり、とても広い。

そこに住んでいるのはベルクともう一人だけで、その一人と言うのがお婆だ。

外見はとてつもなく魔女っぽい。鼻は鍵鼻で、いつも黒いマントを身につけている。けれど中身はともおおらかなおばあちゃんである。お婆はベルクのお世話係として、そしてこのお屋敷の管理も任されているらしい。私はこのお屋敷でお婆のお手伝いをさせてもらいながら、勉強をさせてもらっている。

今すぐにでも元の世界に変える方法を見つけないのだが、この国、この世界に対する知識も何もない状態では全く身動きが取れない。と、いうわけでベルクとお婆の二人から教わって、日々勉強に励んでいる。

「おはやー、ベルク」

「おはよう、ユリ」

……やはり発音が難しい。まだまだ努力が必要だ。そんなことを考えながらしかめ面をしていたら、ベルクが私の頭を撫でてくれた。ベルクの手は大きい。（というか、手に限らず全部大きい。身長は2メートルぐらいある。お婆も170弱ぐらいある。もしかしたらこの世界の平均身長はあっちと比べて大きいかもしれない）大きな手で撫でてくれるのは、何だか子どもになったようで少し気恥ずかしい気もするが、ちょっと嬉しかったりする。

私はどちらかというと身長も大きく、加えて普段から落ち着いていて、実年齢よりも上に見られがちだった。

いつも周りからそう見られていて、そうあるべきだと考えるようになっていた。

けれどこの世界に何も知らないまま来て、頼ることしか出来なくて甘えてばかりでいる。

ベルクは頭を撫でるのは毎日のようにしてくるし、ときどき子どもを抱っこするように片手で私を抱えたりすることもある。

決して軽くはない私を軽々と持ち上げるベルクは、所謂騎士というものらしい。

週5くらいで、イギリスの衛兵を思い起こさせるような制服を着て出かけて行く。その凛々しい姿はとてもカッコいい。とてつもなくカッコいい。

顔立ちも中々整っていて、すごくモテそうな気がする。気がするとうるか絶対モテるだろうね。

がっちり体系で、寡黙で。正直私の好みドストライクな人から優しくされたら、ときめかないわけがない。

今、こうやって精神的に狂うことなく前向きに頑張っていけるのも、

素敵なベルクと優しいお婆のおかげである。
今日もかっこいい制服を着て出かけるベルクをお見送りしてから、
お婆のお手伝いをして、勉強に励もう！

*

夜になり、私はベルクの帰りを今か今かと待っている。
今日の語学の勉強（完全に幼児向けのイラスト付きの本を教科書と
している）で、とても良い言葉を教わったのだ！
お婆に言ったらとても喜んでくれた。きっとベルクも喜んでくれる、
と思う。わくわくしながら私は待っていた。

「ただい」
「おきやえり、ベルクっ！」

若干被ってしまったけれど、ベルクは嫌な顔を見せず、駆け寄る私
を見て微笑むように目を細めてくれる。そしてすぐ傍まで来た私を
片手で抱き上げた。

「ただいま、ユリ」

そう改めて言つて、またその大きな手で撫でてくれる。その居心地の良さに一瞬眠気に襲われたが、それを振り払い、ベルクに言つた。

「きょう、言葉、習つ、した。私、ベルクに、言つ。聞いて、おねあい」

「うん、勿論」

今日習つたことを頭の中で復習する。よし、大丈夫だ。ちゃんと覚えてる。

「ベルク、いつも、ありがとう」

ありがとう、は前に習つた言葉。比較的最初に教科書に載っていた。これからが本番だ。

「私、ベルク、すき」

「！」

「すき、いっぱい。私、ベルク、すき、いっぱい。ありあとう、ベルク。すき、いっぱい！」

よし、言えた。自分では見えないけれど、おそらく今自分は所謂ドヤ顔をしているだろう。

ドヤ顔でベルクを見る。しかし、そこには私が期待した反応はなかった。

ベルクは私がここにきてから初めて見せるような、目を見開いて呆けるような顔をしている。

「…ベルク？」

「……」

もしかして、何か変なことを言ってしまったのだろうか。おかしいな、ちゃんと覚えたはずなのに。

お婆に助けを求めようと、振り返ろうとしたときだった。微動だにしていなかったベルクが急に動いた。

「!?!」

ベルクはゆっくりと顔を私の顔に寄せたかと思うと、そのままくっつけてきた。ただくっつけたと言っても、ベルクの唇が私の唇のすぐ横にくっついたのである。……ほぼキスじゃん!

あまりにも予想外の出来事に、今度は私が固まった。どれほどその状態だったのなんてわからない。10秒だったかもしれない、もっと短かったかもしれないし、長かったかもしれない。時間の感覚も麻痺するくらい驚いた。

「ごめん、着替えてくる!」

さつきとは逆に、勢いよく離れたかと思うと、ベルクは私を地に降ろした。そして早口に何か言った後、足早に去って行った。

一連の流れについて行けなかった私は、ベルクの後ろ姿が見えなくなった後も暫く呆然としていた。

私たちのこのやりとりを見ていたお婆が、ニヤニヤしていたなんて全く知る由もなかった。

02 (台詞有) (後書き)

一文の前後だけでも良かったのかな……

閑話（前書き）

読まなくても何の支障もないお話です。

もしかしたら今後の展開の軽いネタバレになるかも？

二人が出会う直前です。

閑話

あれは、仕事から帰宅してすぐのこと。服を着替えようと、ボタンに手をかけたときだった。

「ベルクさん！大変よ！」

ドア越しにお婆が声を上げた。幼い頃から世話になっているが、お婆がこの時ほど慌てた様子を見せたことはなかった。かつてない只ならぬ事が起こったのか。俺は直ぐにドアを開けた。

「何があっ たんです？」

「森にドーウルが下りて来たみたいなの」

「ドーウルが？」

ドーウルとは、キメラの一種のことである。昔、この国では魔法によつてキメラの生成が行われていた。しかし今ではその生態系の危険性から禁止されている。

現在でもその子孫が僅かながらに生存しており、一部の山に住んでいるのだ。我が屋敷のある森もそのキメラが住まう山の麓にある。ごく稀に山から下りてくることがあるため、その際にはキメラを山へ追い返すという役割を俺とお婆で担っている。

俺は剣、お婆は魔法の能力を見込まれてこの役を担わされた。

お婆はこの国随一の魔法使いだ。出来ないことはない、と言っても過言ではないほどの能力の持ち主である。つまりこの役はお婆一人だけでもなんとかなるのだが、本人はあまり自信の能力を使いたがらない。（魔法に頼りすぎると自分が人間じゃなくなる気がする、と言っていた）

それ故、俺と二人でこの屋敷に住んでいるが、本来ならば王宮に住む権利を有するほどの人である。

お婆はこの広大な森全体に、侵入者が現れたらすぐにわかるように仕掛けをしていた。

この屋敷に住んでから今までで、キメラが降りて来たのは片手で数えられるほど。そのキメラを追い返すのは俺の役目であった。

キメラが下りて来ただけで、このお婆が慌てるわけがない。一体何が起こったのか。

「人の気配がするのよ」

「人？町民ですか？」

この森の隣にはそれなりに大きい町がある。一応森には無暗に近寄らないように通達している。

「それがね、町の人ではないみたいなの」

「では一体誰が？」

「突然現れたの」

「……は？」

「それまで一切気配がなかったんだけど、急に現れたのよ」

転移の魔法でこの森に来たということか？転移の魔法を使えとな

ると、高位の魔法使いであろう。

「魔法使いではないわ。一般人よ」

「え？では何故」

「そんなことは後でいいから！大変って言ったでしょう！その子ずっと森の中ぐるぐるしているみたいでね、しかも間の悪いことにキメラが下りてきて、もしかしたら鉢合わせしちゃうかもしれないのよ！早くその子のこと助けてあげて！」

「……わかりました」

ドアの横に置いてあった剣を持ち、お婆に転移の魔法を施してもらい、俺はその場に着いた。

そこに居たのはドーウルと、黒い髪の毛と黄色い肌の女の子だった。

*

「……これで良しと。さあて、ベッドでも整えておこうかしらねえ」

閑話（後書き）

お婆無双。

03（前書き）

たくさんのお気に入り登録に感謝と謝罪の意を表して土下座したいです。

こんなへば小説でごめんなさい。

あまり深く考えずに、かるーく読んで頂ければ幸いです。

あれは、喜びを表すキスだったらしい。お婆に教えてもらったのだが、この国では相手に何かしてもらって喜ぶと、感謝の意を表すために頬へキスをするのだとか。

流石、欧米人と容姿が似ているだけのことはある。喜びをキスで表すなんて、恋人ならまだしも、同居人という関係でするなんて、日本では考えられない。

口のすぐ横だったのは、頬にしようとして誤ってずれてしまったという解釈で問題ないだろう。

あの後、制服から着替えて戻ってきたベルクが深刻そうな顔で「ごめん」と言ってきたのも、「頬にしようとしたけど少しずれてしまったごめん」ということだろう。

郷に入れば郷に従え。それにわーきゃー言うような年でもないし、柄でもない。

むしろベルクのように素敵な男性にキスもどきをしてもらったのだめったにないどころか、今後の人生でもあるかどうかわからないぞ！感謝すべきだ！

「ありあと」

ベルクは首を傾げていた。わからなくて正解です。

そんなこんなでキス未遂事件も一件落着。私は今日も今日とてお手伝いと勉強に勤しんでいる。

一仕事終え、ベルクのもとへ急ぐ。そう、今日はベルクのお仕事がお休みなのだ。

お休みの日はいつもベルクが私の勉強をみてくれる。ベルクにお婆との一週間の勉強の成果をみせるのだ。これはここで勉強し始めてから、ずっと行っていること。

部屋で向かい合わせになって椅子に座る。私が一週間で覚えた言葉を使い、ベルクに質問する。ベルクは間違いを指摘しながら、答える。これを繰り返していくのだ。いつもベルクの部屋で行うのだが、今回は何故かダイニングに呼ばれた。

「どうして、ベルクの部屋、違う？」

「……気分だ」

「ふーん？」

少し気にはなったが別に困ることでもない。まあいいか、ということとで、早速一週間の成果を披露し始めた。

やはり発音が難しい。幾度指摘されてもなかなか直すことができない。お婆にもベルクにも優しく丁寧に教えてもらっているのに申し訳ない。そんなことを思っていたら顔に出ていたのだろう、ベルク

がその大きな手で優しく頭を撫でてくれた。

よしっ元気出た。次で最後の質問だ。個人的にもベルクに聞いてみたかった質問でもあるので、頑張ろう！

「ベルクのねんれい、いくつ？」

「……30歳だ」

初めて間違いを指摘されなかった！いや、あの時も指摘なれなかったか。しかし成果発表の場で指摘なれなかったのは初めて。快挙である。

ベルクの年齢は（数字は10の位までしか習ってないが推測するに）おそらく30歳と言ったのだろう。

30歳か。うん、そんな感じだ。同年代である20代前半にはあまり感じられない、包容力のあるどっしりとした安定感にとても胸がときめく……っていやいやいやいや、何を考えているのだ自分。

「ユリ」

「はい！」

悶々としていたところで名前を呼ばれ、やけに気合の入った返事をしてしまった。ベルクの顔を見ると、とても真剣な顔で私を見つめている。きゅん……じゃなくて！雑念を捨てなさい自分！

「ユリは、いくつだ？」

「え、」

逆に質問されるのは初めてだ。もしかしてちゃんと発音を間違えることなく質問することができて、少し難易度を上げた教育を施してくれようとしているのだろうか。それならばベルクの期待に応えるべく、ここは華麗に答えようではないか！

と、気合は十分あるけれども、知識は伴っていないという悲しい事実。私は今のところ0から10までしか言えないのだ。しかしそれをベルクはわかっていているはず。つまり、0から10までの数字を使って、表現しなさいということだろう。

「2と、3、歳」

23歳。つまりベルクより7つ年下である。

ベルクは私の答えを聞くと、何故だか思いっきり眉間に皺を寄せて呟いた。

「5歳……」

「!?」

あれ？ベルク今5歳って言った？なんでそんなことに。もしかして2と3を足した？え、そういう風に答えることを要求されていたのか。それにしても5歳って……外国人から見ると日本人は若く見られるというけれど、それはいきすぎではないだろうか。それほど私の答え方がまずかったのか。

「違う。私……10と10と、3、歳。ベルクより、7歳、下」

「……………23歳？」

推測するにそれだと思います、先生。

ベルクは再び私の顔をじつと見つめた（平常心、平常心）。かと思うと、何故か今度は手で顔を覆い、加えて俯いてしまった。……もしかして、絶望的に回答の仕方が悪かったのだろうか。

「ベルク、ごめん」

そう言うときベルクは俯いていた顔を上げた。その顔は先ほどよりもやや赤らんでいるように見えた。それがなんだか色っぽくて……駄目だ、目を合わせでは駄目だ。このままではなんか、どうにかなくてしまいそうな気がする。今度は私が俯く。

ベルクはいつもより優しく、頭を撫でてくれた。ちらっとベルクの顔を覗き見たら、優しくて温かい笑顔で。平常心なんか保てるわけもなかった。

03（後書き）

これから一気に畳みかけたいと思いますです
さっさと完結させて番外編書きたいです

04（前書き）

珍しく湿っぽいです

あれからまた月日が流れまして。

お手伝いと勉強を一生懸命やっていることには変わりはありません。しかし、なんだかベルクとの接触は格段に増えた。接触というか、ベルクがやたらと私を抱き抱えたり、頭を撫でまくったりしてくる。ベルクに抱えられるのも決して嫌じゃないというかむしろ嬉しいのだが、やはり恥ずかしい。こちらの世界で触れ合いはコミュニケーションの一部として当たり前なのかもしれないけれど、私が今まで生きていてそういった手法を使った覚えはまるでない。慣れないというのもあるが、最近はなんだか妙にベルクを意識してしまう自分がいる。

前にも言ったが、もともとベルクは私の好みぴったりの男性なのだ。そんな男性に優しく微笑んで頭を撫でられたらそれはもうときめく他ない。意識しすぎて抱きあげられたときとかまともに顔を見るとができない。

ベルクから視線を逸らした先で、お婆が某家政婦の覗き見よろしく顔を半分だけ出して、私とベルクを見ながらニヤニヤしていることが多い。まことに居たたまれない今日この頃である。

一応宣言しておくが、ここにきてからの数か月を全てベルクとのときめきライフに費やしていたわけではもちろんない。

がつつりお手伝い（無駄に多い部屋の掃除や食事作り、庭の手入れなど）もしてきたし、そして勉強もかつてないほど頑張っている。おかげさまでだんだんと上達している（話す能力が今一なのは否めないが）のを実感している。これもベルクとお婆の指導の賜物だ。

結果、簡単なものではあるが本を読めるようになった。

そう、私が勉強を始めた目的でもある、元の世界に帰る方法を探すための、参考になる本を読めるようになったのだ。

ベルクやお婆に聞くことも考えたが……どんな反応をされるのかを考えると、怖くて聞けなかった。

このままこの世界に留まらざるを得ない状況になったとき、私には彼らしかない。ずっとここでぬくぬくとお手伝いをするつもりではない。そのうちちゃんと独り立ちをしなくてはならないだろう。それでも、帰って来られる場所を欲するのは贅沢なのだろうか。

何だかこの世界に留まること前提みたいになっているが、これには理由がある。実はもう既に異世界についての本を見つけてしまったのだ。

その本を読んでわかったのはまず、この世界には魔法が存在しているということ。ただし皆が皆使えるというわけではないらしい。昔は大勢いたけれど、何らかの理由で大幅に減ったとか。

次にわかったのは、その魔法で異世界から何かを召喚できるということ。ただし非常に高度な魔法らしく、おいそれとは出来るようなことではないらしい。

そして最後、その召喚したモノの返還の方法。それはこの本曰く、「ほとんど不可能である」らしい。召喚すること自体も酷く難しいのに、それを元に戻すというのは更なる高度な技術が必要、と書いてあった。

……と、いうことで私が絶賛ネガティブ中の理由がおわかりになりましたでしょうか。

私が元居た世界に変えることができるのはほとんど不可能らしいです。ははは、笑えない。

特に今、一日が終わろうとしている夜。一人でいるとき。笑えないどころか涙も出てきそうだ。

ベルクと初めて会って大泣きして以来、私は泣いていなかったし、泣きたいとも思っていないかった。確かに不安ではあったけれども、ベルクとお婆と言っ心強い支えもあって、頑張ろうと思えた。

しかしここにきて、絶対的な目標が「不可能」と否定されてしまった。

うん、泣いても良いよね！どう考えても！

「……っ」

「ユリ？」

「！」

慌ててパジャマの袖で僅かに出ていた涙を拭ってから、振り返る。そこには案の定、ベルクがいた。

「どうしたんだ。眠れないのか？」

言いながらベルクは一步步近づいてくる。近づいたら顔を見て泣いていたことに気付かれないだろうか。そう思った私は俯こうとした。

しかし、ベルクは既にすぐ傍に近づいてきていて、私の両頬を手で優しく包み、俯くのを阻止された。首が痛くならない程度に私の顔を上げさせると、ベルクは腰を屈めて自身の顔を私のそれに寄せる。すぐ目の前に、眉を寄せたベルクの顔。その綺麗なスカイブルーの色の目に映るのは、情けない顔をした自分の顔だ。

ベルクは親指を動かし、私の瞼――まなじり――を擦る。

「……泣いていたのか」

案の定バレている。まあこれだけ顔を近づけたら、バレるのもしようがない。

「何があつたか、言えるか？」

私はどうやらこの世界の人に召喚されたくなくて、本当は異世界人なのです。お婆とベルクから勉強を教わって、本を読めるようになったので元居た世界に帰る方法を探していたら、本にほぼ不可能と書いてあつて絶望したのです。

ベルク、私が異世界から来たと聞いてどう思いますか。ベルクは懐がとんでもなく深いので受け止めてくれるかもしれない。けれど、もし拒否されたら？今までと同じように、頭を撫でてくれる？それとも、もうこうやって触れてもくれない？

言いたいけど、伝えたいけど、言葉が出なくてもどかしい。

また、涙が出そう。唇を噛み締めて、目を瞑って。顔を隠せない代わりに、涙を隠したくて。

「ユリ」

そう言っでベルクは、私の頬から手を離したかと思うと、今度は私の背中に回し、抱きしめた。いつもの子どもを抱きあげるときとは違っ、両手でギョッと私の身体をすっぽりと包みこむ。

「ユリ、ユリ、」

耳で、ベルクは囁くように私の名前を言う。その度に息が耳にかっで、くすぐったい。けれどベルクはそれに気付いていないのか、ずっと私の名前を呼び続けている。

「ユリ、ユリ、ユリ、」

ベルクが私の名前を呼ぶ。本人は意識していないのかもしれないけれど、それは私という存在を肯定してくれているような気がして、ベルクの身体の温もりが、すごく優しく感じて。

私はベルクの背中に手を回し、しがみつくと、静かに涙を流した。

ふと、何かが頭を撫ぜている感覚に気付いた。ゆっくりと、優しい居心地が良くて、深い眠りに落ちていきそう。しかし、それは急に動きを止めてしまった。何故だろう。

「ユリ？」

優しい、あの人の声。そう、ベルクだ。目を開けると、やはりそこにはベルクがいた。いつものきちんとした服装ではなく、少し乱れた服装はベルクを艶めいて見せる。

もつと撫でて。何だか声を出すのが億劫だったので、訴えるように頭をベルクに押し付けた。

するとベルクは何故か私の身体を抱きしめ、それまでうつ伏せだった私をひっくり返してしまった。何故だ。でも頭撫でてくれるのも好きだけど、こうやって抱きしめられるのも居心地が良いし、まあ良いか。

よし、もう一眠りしよう。しかしベルクはそうは思っていなかったらしい。

「ユリ」

耳元で名前を呼ぶ。だから、それはくすぐったいんだって。身を振ってそれから逃れようとするも、がちりホールドされていて、それは不可能だった。ベルクはそんな私をお構いなしだ。

「ユリ、ずっといよう」

……え？

「ずっと一緒にいよう」

……何かプロポーズみたいな台詞が聞こえたような気がするのだが
気のせいかなー。うーん。
ベルクはそれまで私の顔の横に寄せていた自身のそれを、正面から
向き合うように移動した。私の顔とベルクの顔の距離、数センチ。
今にもくっついてしまいそう。

「ユリ」

低く、掠れたベルクの声。良く分からないけれど、甘ったるい雰囲気。
胸がドキドキする。

ベルクが動いた。ついに、その距離がゼロに……

「弱みに付け込み自分のベッドに入れて、さらに朝が弱いのを知って寝起きを襲うなんて。いつからそんなにあざとくなったのかしら、ベルクさんったら」
「っお婆！」

うん？お婆？

ベルクが珍しく慌てている。私をホールドしていた腕を解くと、身体を起こし、ドアを見つめている。

私も漸く動かせるようになった身体を起こす。ベルクの視線の先を見ると、お婆が笑顔でドアの前に立っていた。

「……いつからそこにいたんですか」

「いつって、ベルクさんが起きてからですよ。ユリの身体を抱きよせて自分の体の上に寝かせて、愛おしそうに頭を撫でて、思わず身体の方に手を伸ばそうとして寸でのところで止めたところもバッチ

「見ましたよ。」

「な、」

「あ、それと昨日のこともちゃーんと知ってますからね。泣き疲れてしまったユリをお姫さま抱っこでユリの部屋まで連れていって。けれど何故かドアの前で数秒固まっていたかと思うと、自分の部屋まで連れて行って、そのままベッドに入れましたよね。私、手を出すのかと思ってハラハラしちゃったのだけれど。良かったわ、流石に同意なしに致しちゃったらユリが可哀想なもの」

「……」

「？」

「本当に良かったわね、ベルクさん。ユリったらまだ頭が正常に働いてないみたいで、私が言ったこと理解できていないみたいよ」

良く分からないけれど、ベルクは顔を俯かせている。熊さんみたいな大きな身体で、しょんぼりしている姿は何だか可愛い。

「さあ、ユリ。話したいことがあるから、顔洗って着替えてきなさい」

「ふあい」

「うおおおおお」

顔を洗って思考もスッキリした私は、羞恥心でどうにかなりそうだった。

泣き疲れて意識を失うって子どもじゃないか。というかベルクは一体何をしていたんだ。何かもう、完全にキスする感じじゃなかった？ちゅー？接吻？いや、凄く嬉しいけれど。って、何を考えているんだあああ

「ユリ、気持ちわかるけれど早くこっちに来なさい」
「……はい、お婆」

05（後書き）

本当は最後にしようとしたのですが、思った以上に長くなったので一旦区切りました。

ベルクはむっつり設定です。

最終話（前書き）

長いです。

前半とかほとんど説明なので、特に読むのが煩わしいかもしれませんがそんな時はこれさえ知っていれば万事解決、お婆が最強。

最終話

「私、魔法使いなのよ」

「へ？」

お婆の話は、この言葉―予想もなかった言葉に、直前までの羞恥心など吹き飛んでしまった―から始まった。

お婆の話を要約するところである。

この国きつての魔法使いであつたお婆はある日思った。そうだ、世界一周をしよう。

「何故唐突にそんなこと思ったのかも気になるのですが……」

「ん？どうしたの、ユリ」

「あの、私の世界には魔法というものは存在しないんですよ。一応本で魔法が存在することは知っていたのですが……どうも実感出来なくて」

「それだったら、今実際やっているじゃないの」

「え？」

「私の言葉も全部わかるし、自分の言いたい言葉もスラスラと出てくるでしょう」

「……は！」

ちよつと可哀想な子を見るような目で私を見るベルクは、置いてお

くとして。続きである。

世界一周に行くことは決定したものの、お婆の住まう屋敷には、幼いころから面倒を見てきたベルクがいた。

ベルクを一人にすること自体に何の問題はない。だが一つ問題があった。ベルクに結婚する気配がなかったのだ。

ベルクもいい歳だ。それっぽい女性の存在があってもよいはずなのにそれが中々なかった。

まだ、そんなに焦らなくても良いかもしれない。けれど、自分が世界一周―世界は広く、一周するのにどれほどの時間がかかるかわからない―している間に、そのままであつたらと思うと不安だ。

そうだ！自身の魔法を使って、ベルクと最も相性の良い女性を召喚しようじゃないか！

と、いうことで私が召喚されたらしい。

「……ベルクは私が召喚されたということは知っていたんですか？」

「いや。そもそも召喚の魔法は数百年近く前に行われたと聞いただけで、実際に出来るなどとは思っていなかった。何らかの形でお婆が関与しているとは考えてはいたが……」

ベルクにとつても驚きの事実であつたということか。お婆の力半端ないですね。

まあそういうわけで私が召喚されて。

最初に私がこの屋敷ではなく、遠く離れたところに出て来たのは、久々に使った高度な魔法だった故にミスをしてしまったからだとか。ちなみに私を襲ってきた犬もどきはドーウルという名のキメラらしい。あの後ベルクによって気絶させられ、山に帰ったということだ。

った。

最初はミスしたが、その後はまあお婆の思惑通りに事が進んだ。得体の知れない私を、優しいベルクは保護すると決め、まあその先は御覧の通りです。

私たち二人の様子をニヤニヤ見て楽しんでたといことですね、お婆は。

「あの、何で最初から今みたいに言語を理解できるようにしなかったんですか」

「障害があつたほうが、恋は燃えるもの」

「……」

一瞬殺意が芽生えたことを咎める人はいるまい。

「それにしてもベルクさんがなかなか攻めの姿勢に転じないから焦ったけれど、良かったわ。漸く決めたみたいで。どうせまだはつきり言っていないでしょう。私少し準備することあるから部屋を出ていくから、その間にちゃんと言いなさい」

「……先ほど言ったが、お婆が途中で」

「返事聞く前に何かしようとしていたように見えましたけれど」

「……」

「じゃあ、ちょっと待っていてね、お二人とも。ベルクさん、大丈夫

夫よ。傍から見ていたらもう完全に恋人同士だったから、頑張つてねえ」

台風が過ぎ去ったような静けさだった。と言うか正しくお婆は台風だった。

周りを振り回しまくって、何事もなかったかのように去る。

……私は一体どうしたら良いのだろうか。チラッと隣に座るベルクを見ると、何故だか目を瞑っていた。見られてないのを良いことに、私はじつとベルクの顔を見つめる。やっぱり、かっこいい。

……ああもう認めるさ！私はベルクのことが好きだよ！惹かれてるかもーとか曖昧な表現で逃げていたけれども、お婆にはバレバレだったみたいだしね。そうさ、私はベルクのが好きさ、大好きさ！お婆の言葉から察するに私たちは相思相愛、ということらしいのだが……実際のところどうなのだろうか。本当に、ベルクは私のことが、す、すき、なのだろうか。

悶々と考えながらベルクの顔を舐めまわすように見ていたら、今朝もう少して私の唇に重なりそうだった、ベルクのそれに目が行ってしまい……うあああああ。

邪な思いで頭がいっぱいだ！それを振り払うように首を左右に思い切り振る。あ、振りすぎた。

振りすぎた頭を落ち着かせるために一時停止していたら、急にベル

クが立った。

立ったかと思うと、ソファに座ったままの私の目の前に跪く。

「俺のせいで迷惑をかけてしまつて悪かつた」

「そんな、謝らなくても良いですよ。むしろベルクは私と同じように、お婆に謀られたわけですから」

「……そうやって話すと、本当に23歳なのだとわかるな」

「そんなに若く見えるんですか？私、あっちだと老けて見られていましたよ」

「まあ身長がこちらの子ども並みに低いからな。顔立ちも幼く見えるし……本当に良かった」

「良かった？」

「ああ、いや。何でもない気にするな」

そう言つてベルクは頭を撫でてくれた。うーんやつぱり好きだな、ベルクの大きな手。

数度撫でたかと思うと、頭の上にあつたベルクの右手は下がつていき、頬を包んだ。左手は、いつのまにか私の右手を握っている。

あれ？なんか、あれ？

「ユリには悪いが、お婆には感謝している」

「……」

「こうして、ユリに出会うことができた」

顔が一気に赤くなつたのがわかる。そんな私の顔を見たベルクは、凄く、凄く優しい笑みを浮かべた。

やばい、心臓がばくばくいつている。ベルクは私の心臓を壊す気なのか。
そんな笑顔を見せられたら、ますます顔に熱が集まるに決まっている。絶対今リングに負けなくらい真赤だよ、いや負けるけどね。比喻ね。

「俺はユリが好きなんだ」

優しい笑みを浮かべたまま、スカイブルーの瞳は真摯に私を見つめている。ああ、これは現実なのだろうか。ベルクという素敵な男性に、告白されているとか。夢？もしかして、異世界に召喚されたあたりから全て夢だった？そんな壮大な夢は見られるのか？
思考回路がぐちゃぐちゃになっている私を知ってか知らずか、ベルクの右手は私の頬を触れるだけにとどまらずに撫でてきて、手を握っている左手は先ほどよりも少し強く握っている。

「愛している」

うわああああああああ。実際に声に出さなかったことを褒めてほしい。素敵な男性に、好きな男性に、自分と同じ想いだと、愛していると言われる。

経験値の低い私は、ここでのように返せば良いのかわからない。というか考えられるほどの余裕を持っていなかった。

衝動的にベルクの身体に抱きついた。腕をベルクの首に回し、身体をピッタリとくっつける。

あちらの世界に居たときには、したこともないような普段の私からは想像も出来ない大胆さだ。どうやらこちらの世界に来てから甘え癖がついてしまったらしい。

ベルクに出会ってしまった、これが一番の原因だ。

「私も、ベルクが好き。大好き」

自分の言葉で伝えられることがこんなに嬉しいなんて、言葉が全く伝えられない状況にならなかったら思わなかった。

顔を見て言えたら良かったのかもしれないけれど、どうしても恥じらう気持ちが大きすぎて（随分と乙女だな自分！）、抱きついたまま自分の気持ちを伝えた。

ベルクはそれに答えるように、ギュツと抱きしめてくれた。

うわー、すごく幸せだ。こんなに満たされた気分になるのは初めてではないだろうか。そう感じるほど、幸せだ。

お婆の言う「最も相性の良い」も伊達じゃないな。流石国どころか世界を超えて、異世界から連れてきた（連れ出された）だけのことがある。

そう、異世界。

……あれ、私ものすごく大切なこと忘れていないか？

昨夜のことを思い出してみよう。私はベルクの前で泣きました。何故、泣いたのか。それは自分の元居た世界に帰ることができないと思っただからです。

いくら舞い上がっていたとは言え昨夜意識を失うまで泣きつくした原因を忘れるとか阿呆か。馬鹿か。

成人になって数年が経過し、社会人として社会に出ている大人が、目の前の色事にしか目を向けられないってなんかもう駄目だろう。そうゆうのやって良いのは若い子だけ！10代のぴちぴち女子だけ！ぴちぴちとか死語使っている時点でアウト！

ベルクは雰囲気の変わった私に気付いたらしく、ややキツイぐらいだった腕の力を緩める。

ちよつと前までの高揚しきった状態では出来なかったが、冷え切った頭の今ならば、緩めただけなので距離がとても近いベルクの顔も真正面から見る事ができた。

「ベルク、あの、私が昨日泣いていた理由なのですが、」

「ああ」

「本を読んで、元居た世界に帰ることができないと知ったからなんです」

「……」

ベルクは眉間に皺を寄せて黙ってしまった。まあ直前まであんなに盛り上がっていたのに、一気に引き下げたからね。幻滅したのかもしれない。でも、「これから」を考えると時には絶対に必要なことで。

「私元の、っつ」

ベルクは言葉を遮るように、私の身体をさっきのなんか比べ物にならないくらいに抱きしめた。苦しいほどに。まじ苦しい。

「つべ、る、」
「……」

もはやプロレス技みたいなことになっていきますよ、ベルクさん。熊さん並みの大きい身体ってことをお忘れですか。昨夜に引き続き気失っちゃうよ！

「ベルクさん何みつともないことしているの！早く離れないと暫くユリと会えないようにするわよ！」

救世主お婆現る。

ベルクはようやくと力を抜いてくれた。さっきのは結構本気でやばかった。ここはがつんと言ってやらねばと思ったが、眉を八の字にして非常に悲しそうな顔で、「ごめん、ユリ、ごめん」と言われてしまいました。

だからなんで熊さんみたいに大きな身体のくせにそんなに可愛いのか。許してしまうじゃないか。誠に遺憾である！

おバカなことを考えている思考をぶった切ったのはお婆のさらなる

声。

「さあ、逃げられる前にユリの親御さんに挨拶に行きましょう!」

え？

「あの、お婆、私元の世界に帰れるの？」
「もちろん」

即答ですか。

「えっと、あれ？あの本には不可能って……？」
「『ほとんど』って書いてあったでしょう」
「ありました、ね」
「可能性が僅かでもある魔法ならば、私に出来ないことなんてないわよ」

お婆強し。

あれだけ泣いたのに、あつという間に解決しちゃいましたよ。なんてことだ。

茫然としていたら、若干空気と化していたベルクがいきなり頬にキスをしてきた。まさに不意打ちである。

ベルクを見ると、さっきまでの悲しげな表情は消え去っていた。そこにあるのは盛り上がっていたときに見た笑み。

ベルクは、衝撃の事実の発表に加え不意打ちをくらうという挟み撃ちにあい茫然としたままの私の両脇を掴み、立たせた。

「ユリ、行こう」

そう言って片手を差し出すベルクは、かつこよくて、頼もしくて、素敵で、愛おしくて。

その手を拒否するなんて、あり得なかった。

私はベルクのその大きな手をとって、自分の中では最高の笑みを浮かべた。

「じゃあ、行きましょうか」

最終話（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

1 話を投稿した当初は、まさかここまで多くの人に読んでもらえるなどとは露にも思いませんでした。

お気に入り登録をしてくださった方々、評価をしてくださった方々、この小説を最後まで読んでくださった方々、本当にありがとうございました。

都合の悪いところはすべてお婆を使うというズルイやり方になってしまいましたが、区切りをつけることが出来たので良かったです。

この後は、番外編をいくつか載せていきたいと思います。

実を言つと、もともとこの話は番外編を書きたくて始めました。なので、番外編を出し切ってから完結とさせていただきたいと思います。

この後もお付き合いいただけたら、嬉しいです。

最終話直後

「じゃあ、行きましようか」

お婆はそう言つて、廊下に続くドアを開けた。

そこには廊下が、なかった。そう、あるはずの廊下の代わりにあったもの、それは、

「……優里？」

テーブルを囲んで食事をしていた我が父と母であつた。え、何で、と言うまでもなくお婆の力なのだろうけれど。

二人はこちらを見つめたまま驚いている。そりゃあ急に出て来たものね！驚くだろうよ！

「あんた何で家に帰ってきてるの。会社辞めたの？」

え、そこなのお母さん。普通お父さんみたいに口を半開きにして、

ついでに持っていた箸も下に落とすぐらいのリアクションがあっても良いと思う。

そんな風に突っ込みを入れていたら、ベルクが急に一步前に出て、

「突然の訪問になり、大変申し訳ございません。本日、娘さんとの結婚をお許しいただきたく、参りました」

ベルクって時々空気読めないよね。

父はますます混乱したらしく、半開きだった口は本開きになっている。母はというを持ったままであった箸を落として、言った。

「優里が結婚できるなんて……！」

おい、母よ。

*

放心状態の父と興奮状態の母へこれまでの経緯を、お婆の魔法を実際に見てもらうことでなんとか納得してもらった。

（ちなみに今この世界の時間は、私があちらの世界に行ったその翌日らしい。よって失踪騒ぎになっていたりはない。）

そして何故か今、「熟した大人だけでお話があるから貴方達は取りあえず出て行きなさい」とやけに意気投合してしまった母とお婆に家を追い出されてしまった。

そう、ベルク（例によってお婆の力でこちらの世界の服を着用）と二人で街を歩いている。

ベルク、目立つ。

2メートルを超す身長に、がっちりした体格は、なかなかお見受けすることができない。

今すれ違った女性は「熊だ」と呟いていた。気持ち、凄くわかります。

注目されている張本人のベルクはというと、不思議そうに周りを観察していて、自分が注目されていることを全く気にしていない。

その鈍感力、私に下さい。

自分が注目されているわけでもないのに、何だか緊張してしまっている。

少し俯いてベルクの隣を歩いていたら、いきなり視界が変わった。

「っえ！」

「ユリ、どうした？足が痛いのか？」

俯いた私を具合が悪いと判断したらしいベルクが、いつものように私を抱き上げたのだった。

ベルクは心配そうに私を見つめている。その姿にキュンとしてしまった。

「ううん、大丈夫です。ありがとう、ベル、」

私の鈍感力は一瞬であった。

ベルクのこのパフォーマンスで、より注目を浴びてしまったらしい女子高生なんかは「キヤー」とか言っている。きゃー。

駄目だ耐えられん！私は顔を隠すためにベルクの首に腕をまわし、抱きついた。

「ユリ？やっぱり具合悪いのか？」

「……どこかで休憩したいです。ここをまっすぐ行って次の曲がり角を右に曲がって暫く行くと公園に行くのです」

「わかった」

ベルクは私をギュツと抱きしめ、小走りで公園へ向かってくれた。

公園に着くとベンチに座った。いや、正しく言うとなベルクはベンチの上に座り、私はベルクの上に横座りで座らされた。

降りようと試みるも、ベルクは抱きしめたまま離さず、私の頭を撫でている。いや、嬉しいんだけどね。さっきよりは人がいないといっても、いることには変わりはないからね。

しかしベルクのホールドは堅い。少し格闘して諦めた私は、顔をベルクの首元に埋めて、周りをシャットダウンした。

直前に見た小さなお子様を連れた若いお母さんの集団のニヤニヤ顔は、見なかったことにして。

*

ベルクが頭撫で撫でに漸く飽きたころには結構な時間が過ぎていて、あのニヤニヤ集団も帰っていた。

私たちは、今度は普通に二人並んで家に帰った。

家に帰ると、何故か宴会を始めようとしていた。いやいや今日は土曜日ですけども、今まだお天道様はお休みになっ
っていないですよ。

「おめでたいことを祝うのに時間なんか関係ない！」

既に一杯飲んでいた母が叫んだ。父はいそいそと料理をテーブルに運んでいる。

完全なる力カア天下の図である。

さあ、皆で飲むわよ！との母の一声で、宴会がスタート。ベルクは父と何やら話しながら飲んでいて、母とお婆の相手は私がする流れになっていた。ずるい。

そして何だか騒がしい時間はあっという間に過ぎていき、気が付いたら私とベルク以外は皆眠ってしまった。いい大人（本人たち曰く「熟した大人」）が何をやっているのだから。しかし、二人の相手をしていた私も疲れから眠気がピークに達していた。

ソファに凭れかかって船を漕いでいると、ベルクが近づいてきて私を横抱きにする。

「ベッドで寝ような」

ほとんど夢の世界へと旅立っていた私はこの時何故か

「ベルクだいすき」

とか言っただけでベルクに抱きついたらしく。そしてそれを受けてベルクが私の唇に初めてキスしていた、なんてことを知るのは暫く経ってからのことだった。

まあ取りあえずこんな感じで、
お互いの保護者への挨拶は終わった
のでした。

最終話直後（後書き）

次の番外編は数年後の設定の予定です。

4年後 01

私はこの国の騎士団に所属する騎士だ。

騎士団には4つの団で成立していて、それぞれが別の役割を担っている。

その中でも私が所属しているのは第一騎士団で、主に王宮の警護、より王族に近い所で警護をしている。

私は第一騎士団で副団長を任されている。その役職に就いたのは5年前であった。

5年前、私が副団長に就くとともに団長の職に就いたのが、私の同期でもあるベルクだ。

ベルクとは騎士になってから知り合ったのだが、出会った当初から馬が合い、それからの付き合いだ。

ベルクは私と同じ年であるはずなのに、その落ち着いた雰囲気から年上のように思うことが多々ある。

身長ならば私の方が上なのだが、何せ恰幅が良い。

どっしりとした安定感のあるその雰囲気は、団長に相応しい。

しかしやや不器用なところがあるため、そこらへんは私がフォローしていた。

出会ってから10年以上、団長と副団長という関係になってから5

年。

これだけ長い時間を共にいると、何かあった時に察することができ
る。

そのことに気付いたのは、確か4年ほど前だろうか。

最初はほんの些細な変化だった。気のせいかとも思った。

しかし、その変化は次第に確実なものとなっていった。

まず残業をすることなく、仕事が終わるとすぐに帰宅するようにな
った。

前までだったならギリギリまで残っていて、むしろそのまま泊まるこ
と時折あったぐらいだった。

そしてベルクの纏う雰囲気も、以前よりも柔らかいものになった。

団員たちもそれを感じてか、積極的にベルクに話しかけるようにな
り、第一騎士団の雰囲気も良好だ。

きつと、家で何かあったに違いない。

ベルクは私や他の団員と違って、自宅から通勤している。

私の知らないところ、つまり家で何かベルクにとって良い影響があ
ったのだろう。

だが、いくら聞いてもベルクは口を割らなかった。

最初のうちはしつこく聞いてはいたものの、頑固なベルクは揺らぐ
ことはなかった。

しかし、それを漸く知るときが来た。

＊

午前の稽古が終わり、一息ついて書類に取りかかるうとしたときだった。

団長と副団長に与えられた部屋に一人でいたときに、ドアをノックする音と共に「ベルク団長宛てのお忘れ物を持って参りました」という声が聞こえてきた。

「……俺の忘れ物？」

「私が受け取ります」

ドアを開け、やたらと大きい鞆を受け取る。
実際持つと、ずっしりと重い。

一体何が入っているのだろうか。

「見覚えはありますか？」

「確かに俺の鞆であるが……何かを忘れた覚えはない」

不審物、か？そういえばこれを持ってきた者は誰が持ってきたとか何も言っていなかった。

私自身も聞くことを忘れていた。

いくらこの国が平和だからと言って、油断はいけない。意識を改めなければ。

「危険物の臭いはしないので大丈夫だとは思いますが、一応私が確かめます」

「……いや、俺が、」

「団長は念のため下がってください」

鞆を下に置き、チャックに手をかける。

ゆっくりとそれを開けていくと、その中には……

「え」

あまりにも予想外すぎて、私はそれを凝視してしまった。

「おじさんだれー？」

「パパはあー？」

それは、子どもだった。

2歳ぐらいの子どもが男の子と女の子の二人、通りで重いわけだ。子どもたちは二人とも黒髪で瞳の色はスカイブルー！。

黒髪はこの国では中々見かけない。どこか遠い国にはいると聞いたから、その出身の子だろうか。

最初の内は私を見つめ返していた子どもたちだったが、すぐに飽きたようにキョロキョロし始めた。

すると何かを見つけたように、目をキラキラさせて笑顔になった。言った。

「「パパ！」」

そう言つて、子ども2人が駆けて行つた先には、我が友人のベルク。ベルクは困つたような顔をしながら、二人を両腕でそれぞれを持ち上げていた。

「……お婆の仕業か」

「ベルク」

「……何だ」

「どういうことか、説明してもらおうじゃねーか」

職場では普段の口調を出さないようにしていたが、この時ばかりはあえてそうしなかった。今これからは完全にプライベートだ。ベルクもそれを察したらしく、苦い顔をしながら頷いた。

子どもたちは父親との再会を喜んで、無邪気な笑顔を見せていた。

「えーと、つまり、お前は4年前には既に結婚していたと」

「ああ」

「それを長い付き合いの俺にも言わなかったのは、奥さんを他の野郎に見せたくなかったからだ」と

「……ああ」

「あの子たちは双子で、上にもう一人いると。そんでさらに今度また生まれると」

「……ああ」

「なあ、ベルク。その魔法使いのばーさんが何でわざわざ旅行から一時帰宅してまで、子どもたちの存在を同僚に教えたのかわかるか？」

「……………嫌がらせ、か」

でっかい身体を精一杯縮めて（それでもでかい）いる姿は何だか滑稽だ。

何だか動物をいじめているような気がしなくもないが、こいつは友

人のベルクだ。はつきり言ってやらなくてはならない。

「違う。……お前、奥さんのこと大事なんだろう」

「勿論だ」

「だったら自重しろ。薄々気づいているんだろう」

「……」

「ばーさんはいくら言っても聞かないお前をたしなめる為に、俺に教えたんだよ」

「奥さんのこと大事に思うんなら、好きならば、わかるな？」

「……ああ」

渋々、と言う言葉がピツタリの顔だった。

昔はこんな風に感情を表に出さなかった。

きつとこれもベルクの奥さんの影響だろう。

これは、会わないと気が済まない。

「今度、奥さんに会わせろよ」

「断る」

「……」

「……」

この後、書類を片付けながらもずっとベルクを説得し、仕事が終わる頃に漸く約束を取り付けることが出来た。

二日後に、ベルクの家を訪問することになった。

ベルクは嫌そうではあったが、言質は取った。

ベルクをこんなにまでしてしまった奥さん……非常に楽しみだ。

ちなみに、子どもたちはいつの間にか鞆の中に戻って眠っていた。

4年後 01（後書き）

スナイパーベルク

タイトルにしようかと思いましたがさすがに自重しました。

4年後 02（前書き）

副団長の名前はデュイです。

4年後 02

今日はベルクが同僚を連れてきてくれるらしい。
初めてだ。

今私とベルクの間には3歳の娘と、2歳の双子の息子と娘、そして
おなかの中には新しい命が育っている。

正直年子を産むこと、立派に育てられるか不安もあつたのだが、母
や時々帰ってくるお婆、そしてベルクの支えもあって、なんとかや
っていている。

ベルクは家事や育児に積極的で、本当に助かっている。結婚してか
らは必ず定時に帰ってきていろいろ手伝ってくれるのだ。最初は仕
事の方は大丈夫か心配で、聞いてみたら「優秀な部下がいるから問
題ない」と言っていた。

今日はその優秀な部下の一人が来るらしい。
いつもベルクを支えてくれていることに対して感謝の気持ちを込め
て、はりきって仕込みをしよう！

そろそろ生まれてもおかしくないほどに成長したわが子のいるお腹
を一撫でしてから、エプロンを手に取った。

*

「いつまで怒っているんだよ、観念しろって」
「……」

今日一日、いや、約束を取り付けたあの日からベルクはずっと機嫌が悪いようだ。

もう既にベルクの家目の前に来ているのだが、未だに渋るように俺の顔をチラッと見る。

俺はそれに気付かないふりをして、それに対しベルクは一つ溜息をつくと、ゆっくりとドアを開けた。

「ただいま」

「―おかえり、ベルク」

まるで俺の存在を無視するように、ベルクはすたすたと家の中に入っていく。

奥さんらしき声の聞こえた方を見るが、丁度ベルクと重なっているためが見えない。少し小柄の人なのかもしれない。

奥さんに挨拶するために、二人のもとへ足を進める。

ベルクは奥さんの目の前で立ち止まり、抱擁をした。想像はしているが、お熱いことで……ってあれ？抱擁ではなくて、抱っこ？もし

かして奥さんではなくて子どもだったのか？

「ユリ、」

「ちょ、ベルク、お客さんの前では、んむ」

ええええええ。頬ならまだしも口にキス？え、もしかして子どもじゃなくて、奥さん？

キスをして満足そうなベルクと顔を真っ赤にしている奥さん（仮）。奥さん（仮）は抗議するようにベルクの肩を叩き、しかしベルクは懲りずに頬にキスをしてから、奥さん（仮）を下に降ろした。

「デュイ、俺の妻のユリだ」

奥さんだった。

あの子どもと同じ黒髪で、瞳の色は焦げ茶だ。ここらでは滅多に見ることのない、というか初めて見るような顔立ちをしている。

ベルクに抱っこされているときは見えなかったが、お腹も大きい。

奥さんは少し恥ずかしそうに俺に向き合う。すると、奥さんは首を大きく後ろにそらし、口を半開きにして、呆然と俺を見上げた。

「巨神兵……」

「え？」

「あついや、何でもないです」

奥さんは何か呟いたが、よく聞こえなかった。まあ何でもないとやっているの良いのだろう。

俺は結構身長が高い方ではあるし、奥さんは170センチないくらいだ。このままでは首を痛めてしまいそうだ。俺は子どもと接する時と同様に、地に膝を着いた。

「今日はお招きいただきありがとうございます。デュイと申します。ベルク団長にはいつもお世話になっております」

強引に来たくせに何を、と言うベルクの声が聞こえたが、それは無視して笑顔で奥さんに挨拶をした。

「いえ、こちらこそいつも主人がお世話になっていきます！ベルクの妻の、ユリです！すぐにお食事の準備をするので、少々お待ちください！」

少し緊張したように、目をぱちぱちさせながらそう言った奥さんは、キッチンがあるらしい部屋へ駆けて行った。

「
……」

二人の間には無言が流れている。俺はベルクを見ているが、ベルクは視線を合わせない。

「ベルク、お前ロリコ」ユリは27歳だ」

俺の方を睨みつけるように見据えてベルクは俺の言葉を遮るように言った。

しかし、ベルク。ロリコンと言うのは本物の幼女だけではなく、幼い容姿をした女性も対象になるのだぞ。

しばし睨みあっていたが、どこからか子どもの声がすると、ベルクはすぐに目を逸らし、声の聞こえた方へと向かって言った。つまり逃げた。

初めて出会った時よりもがっしりしたその背中を見て、俺は一つ溜息をついて、逃げるように去るベルクの後を追った。

知られざる友人の性癖を知り、何とも複雑な気持ちで幕を開けた食事会。

まさかこの後、奥さんが産気づいて、子ども誕生の瞬間に立ち会うことができるなんて思いもよらなかった。

4年後 02（後書き）

書きたいことも書くことができたので、これにて完結とさせていただきます。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

もしかしたら気まぐれに更新するかもしれませんが、しないかもしれません。

ベルク視点とか、子供たち視点とか……書けるのならば書きたいです

本編02の前あたり（前書き）

やまなしおちなしです

本編02の前あたり

お仕事も一段落つき、私は庭へと向かった。そこでベルクが私を待っている。本日はベルクのお仕事がお休みの日。ベルクが私の先生になってくれる日だ。

キッチンから庭に続くドアを開けて、庭で一番大きな木の元へ向かう。木の根元あたりにベンチがあり、それに座って本を読んでいるベルクがいた。

小走りでベルクの元に駆けていくと、ベルクも私に気付いた。読んでいた本を閉じ、私を見て、僅かに口角を上げている。最初は身体も大きくて無表情にしか見えなかったから、少し怖かったんだけど、良く見るとすごく優しい顔をしていることに気付いた。それに、たぶんだけど前より無表情では無くなった気がするのには気のせいだろうか。

ベルクのいるベンチに着き、隣に座ろうとした、のに、どうしてこなくなった。

説明しよう！今私はベルクの足の間で、ベンチに座っている。そしてベルクは私のお腹の前に手を回している。つまり、後ろから抱っこされている状態だ。

うおー何これ！前に夕方の公園のベンチでいちゃいちゃいちゃいやしたカップルがしていたなあ。

と、思っていたらいつの間にかベルクの手には絵本が。……完全に日曜日の父親と幼い娘のパターンですね。わかっていましたけどね。

顔だけ後ろに向けて、ベルクを見る。立っている時よりも近い距離にある顔。でも、やっぱり少し遠い。本当にベルクは大きい。

ベルクはやっぱり少しだけ口角を上げて、体格同様大きな手で私の頭を撫でた。少し面映ゆくて、直ぐに前に向き直る。ベルクは頭をポンと軽く叩いて、絵本を開きなおした。

うーん完全に子供扱いしているよね。でもしょうがないのかもしれない。察するにこの国？世界？の人は総じて身長が高いらしいので私の身長は子どもサイズなんだろうな。

小学校のころから他の子よりも身長が高くて、そんな扱いを受けたのは本当に幼少期だけだったから、何と云うかむず痒い……。

しかしベルクも私のことを子どもだと思っているようだし……良いよね。

恥ずかしいけれどその誘惑に打ち勝つことができずに、それまでピョンと姿勢正しくしていたのを解いた。つまり、力を抜いてベルクに思いつきり凭れた。

うん、なんかすごく「すっぱり」という言葉がしっくりくる。さっきまで私の背中とベルクのお腹の隙間に冷たい空気があったのが、すっかりなくなって、今は私の身体がベルクの温もりに包まれている。安心感、なのだろうか。すごく、眠くなってきた。というか、もう………

寝てしまった。

ユリの勉強に、と思って絵本の読み聞かせをしようと思っていたのだが、ユリは一文字も読まぬ内に眠ってしまった。

今日も朝から頑張っていたみたいだし、疲れていたのだろう。顔を覗き込むと、口を半開きにして気持ちよさそうに眠っている。

自然と口が緩むのがわかった。ユリと生活し始めてから、笑うことが多くなった。お婆に指摘されるまで気がつかなかったが、意識すると確かにそうだった。

ユリの拳動は何故か目が離せない。家に居る間、ユリが仕事をしていない時はほとんどユリと共にいる。

ユリを見ていると、一緒にいると、何故か癒される。

今まで子どもと触れ合う機会が少なかったから知らなかったが、子どもとはこれほど愛らしいものなのかと思った。

ユリは先ほどは開いていた口を閉じ、もごもごとさせている。何か食べている夢でも見ているのかもしれない。

ここで動いたら起こしてしまうだろう。幸い今日は良い天気で、外の気温も丁度良い。もう少しここでゆっくりしていくか。

持っていた絵本を脇に置いて、ユリが来る前まで読んでいた本を再び読み始めた。

本編02の前あたり（後書き）

久々の大温手でした。

ありがとうございました。

ベルクさんの日常@ついったー（前書き）

悪ふざけがすぎる感じです

ベルクさんのキャラ崩壊しているかも

ベルクさんの日常@ついったー

B e r | h e a d 騎士団長

おはようございます。

妻よりも早く起きたので、久しぶりに朝食を作ろうと思う。

今日の午前の予定に他の騎士団との合同訓練がある。

久しぶりなので楽しみだ。

9月12日の5:32 o b a b a n e t 経由

- - - - -

B e r | h e a d 騎士団長

俺が家を出るまで起きることが出来なかったため、聞いていない。

R T @ k u m i c h u 朝食を食べた奥さんの感想はどうでした？

^^

9月12日の6:27 o b a b a n e t 経由

- - - - -

Ber | head 騎士団長

黙秘権を行使する。RT@tsunodastar ちょw普段早起きの嫁を起きられなくするまでナニやってたんだよwww

9月12日の6:29 obababet経由

- - - - -

Ber | head 騎士団長

朝食の写真は撮っていなかったため、後で代わりに昼食の写真を載せようと思う。RT@azunyanhshs だんちょーさんお手製の朝食写真希望！

9月12日の6:32 obababet経由

- - - - -

Ber | head 騎士団長

宿舎の食堂で昼食。

http://t.co/fyk543bj35jnbh

9月12日の13:05 obababet経由

- - - - -

Ber | head 騎士団長

本日の業務は終了した。

大きな問題もなく、特に午前中の合同訓練はとても有意義なもので

あった。今は二月に一回のペースだが、せめて月に一回行いたい。
明日にでも他の騎士団長らに相談したいと思う。
帰り際に副団長に誘われたが妻の体調が心配なので断った。

9月12日の16:59 obababnet経由

- - - - -

Berhead 騎士団長

ありがとうございます。RT@kazuya|yuki お仕事お
つかれさまでーす(^ω^)

9月12日の17:04 obababnet経由

- - - - -

Berhead 騎士団長

言葉が足りなかったようで申し訳ない。飲みに行かないかと誘われ
た。RT@shizuiza801 誘われたとかwww副団長と
のなれそめkws k

9月12日の17:40 obababnet経由

- - - - -

Berhead 騎士団長

帰宅途中、妻が好きなミューランを見かけた。妻がペットに欲しい
と言っていたので、来月の妻の誕生日にプレゼントするつもりだ。
http://t.co/7gyikbs4urydt

9月12日の17:44 obabaneet 経由

- - - - -

Ber | head 騎士団長

CGとは何だ？RT@hobiron8 CG乙 RT帰宅途中、
妻が好きなミューランを見かけた。妻がペットに欲しいと言っ
たので、来月の妻の誕生日にプレゼントするつもりだ。http:
//t.co/7gyikbs4urydt

9月12日の17:50 obabaneet 経由

- - - - -

8 | ponpon | 8 ぽんちゃん@神谷クラス

@Ber | head あれ？いつものおやすみさないツイートは無
し？奥様とお楽しみ中かな？（笑）

9月12日の23:21 ついつぶる / twipple 経由

- - - - -

Ber | head 騎士団長

おはようございます。

昨晩は一日の最後の挨拶が出来なくえ申し訳ない。

最後のツイートの後、妻に付き添って医師の元に向かったりして時
間がなかった。

今日は有給を取る。

9月13日の5:59 obabaneet 経由

- - - - -

Ber|head 騎士団長

喜ばしいことに子どもが出来た。RT@i|l|laver え、
奥さん大丈夫なの？(・・;)

9月13日の6:02 obabonet 経由

- - - - -

Ber|head 騎士団長

あいがとございます。

@f|a|l|l|358love@a|u|e|o|k|a|n|@8|p|o|n|p|o|
n|8|@k|u|m|i|c|h|u|@36y|o|s|a|9|@b|o|b|y|k|a|m|y|u|
@y|u|k|i|r|i|n|0316@k|o|i|3k|o|i|9@n|a|k|a|m|u|r|a|
k|h

9月13日の6:09 obabonet 経由

- - - - -

Ber|head 騎士団長

(訂正)ありがとうございます。RT@a|b|a|b|o|b|y 嬉しさ
のあまり珍しく誤字の団長に萌えたwww

9月13日の6:13 obabonet 経由

- - - - -

Ber | head 騎士団長

皆さん、祝福の言葉ありがとうございます。全てに返事をする事は不可能なので、ここで一括させていただきます。ありがとうございます。

9月13日の7:02 obabonet 経由

*

「……………」

いつ頃だったか、ベルクが見たことのない小さいパソコンみたいな機器を持っていることには気づいていた。しかし余裕のない日々が続いていて、それが何なのか確認することは出来ていなかった。まさか、まさかベルクが、ツイッターをしているなんてっ……………」

「ユリ？どうかしたのか？」

すぐ後ろから聞こえてくるのは勿論ベルクの声。椅子に座ってベルクのツイッターを読む私を膝に乗せて、その両手で私のぽっこり膨らんだお腹を撫でている。

「何かユリにとって不都合なことが書いてあったか？嫌だったらすぐに消すが……………」

心配そうな顔をして覗き込んでくるベルク。

確かにね、ちよいちよい気になるところはあるよ。でもまあ、なんかベルク可愛いなーとか思ってしまったりなんかしちゃって。

お腹の中のわが子を気にしつつ、身体を捻ってベルクに正面から抱きつく。

「うっん、大丈夫だよ。ただ……」

「ただ？」

お婆がチートすぎて恐怖を感じてしまったよ。

ベルクさんの日常@ついったー（後書き）

やらかしてしまった感が半端ないです。
ごめんなさい。

一応いらない補足←

・お婆の作った機器によって、日本のある世界のネットに繋がることが可能

・面白半分でフォローする人がじわじわと増えてくる

・フォローワーはベルクをなりきりだと思っている

・真面目で素直なベルクさんの性格が丸わかり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4184t/>

大きな、温かい手

2011年9月24日16時45分発行